

第4回 那須塩原駅周辺まちづくりビジョン有識者会議

日時

令和元年12月19日(木)14:00～17:00

場所

全国都市会館 第4会議室(東京都千代田区平河町2-4-2)

出席者

有識者委員

- 涌井 史郎 (東京都市大学特別教授)
- 小場瀬 令二 (筑波大学名誉教授)
- 山島 哲夫 (宇都宮共和大学副学長)
- 松岡 拓公雄 (亜細亜大学都市創造学部長)
- 渡辺 美知太郎 (那須塩原市長)

ファシリテーター

- 朝比奈 一郎 (那須塩原市経済活性アドバイザー)

オブザーバー

内閣府クールジャパン地域プロデューサー

- 陳内 裕樹

株式会社長大

- 幸田 浩明 (社会事業本部まちづくり事業部)

東急不動産株式会社

- 磯目 伸二 (ウェルネス事業ユニット ホテル・リゾート事業本部 リゾート企画部)

株式会社北山創造研究所

- 北山 孝雄 (代表)

議事

(冒頭挨拶)

片桐副市長:

それではみなさんこんにちは。那須塩原市副市長の片桐でございます。ただいまから第4回 那須塩原駅周辺まちづくりビジョン有識者会議を開催したいと思います。はじめに那須塩原市長の渡辺美知太郎からご挨拶申し上げます。

渡辺市長：

皆様、本日はお忙しいところお越しいただきましてありがとうございます。この会議も4回目の開催となりました。さて、先月11月29日に我が市の代表的な地縁団体である自治会、そして12月11日には市内の経済総合団体である商工会から、市内のブリヂストン黒磯工場跡地を有効活用できるよう、要望をいただきました。これについては私も先週の記者会見などで、きちんと取り組んでいく旨表明しております。この跡地は那須塩原駅から約1キロ先にありまして、35haの面積があります。NTTファシリティーズをはじめとする民間企業の方々がメガソーラーの計画をされておまして、一方でそれは景観を大きく損なうものではないかと我々は危惧しておりますし、またこの跡地は那須塩原から大田原を結ぶ一等地でして、かなりポテンシャルがあると考えております。この有識者会議の中でも、この跡地の有効活用に関する方向付けができたらと考えております。

本日からは涌井史郎先生にもお越しいただきまして、4社のオブザーバーの方々と、長丁場ではございますが素晴らしい議論ができると期待しております。本日はどうぞよろしく願いいたします。

朝比奈氏：

改めましてみなさんこんにちは。本日は涌井先生にお越しただいておまして、まず初めに涌井先生の方から自己紹介いただければと思います。

涌井氏：

最初の3回を欠席しまして申し訳ありません。

私は、社会に対して何か取り組む際のキーワードとして、トランスフォーマティブチェンジ(社会的大変容)を掲げておりますが、これは今までは成長がベースだったのを、わずかな生命資源を持続的に利用する上で、その限界から逆進的に考える必要があると思うからです。環境省ではおかげさまで環境基本計画の中に地域循環共生圏という発想を入れることができ、懸命にキャンペーンをやっております。これはクローズドなそれぞれの地域がクローズドのまま自立循環をしていくというものでして、そのためにはどうしても自分の土地の自然資本財に着目した政策を取らざるを得ないです。

これは江戸時代と似ていて、自ずとゲゼルシャフト(利益結合型社会)ではなくゲマインシャフト(地縁結合型社会)を基本とした自立分節型の地域構造が投影された形

でラウンドシャフト(美しい景観)が出来てきたというのが日本の歴史だと思います。そうした自立分節型のブドウ状の構造は今ではりんごのように全てが中央を向くようになっていきます。しかし交通網の整備によって国土は対流化が可能になっており、ワークスタイルもフリーアドレス化が始まっています。

一方自然が有する機能に着目すると、構造物で災害等自然の圧力に対応するという緩和戦略ではなく、日本がその前から歴史的に行ってきた適応戦略。つまり生態系をできるだけ活用した防災管理を徹底するべきという理解が国際的に深まっています。しかしその先駆者の立場は欧米に奪われ、それを逆輸入する状態となっています。第5次社会資本整備重点計画では、国交省の総合政策局により、財源が乏しい中で自然資本財を盾にしながらグリーンインフラを目指し、公共が整備・管理する施策の体系を導入し、一般人が漫然と公共インフラを享受するのではなく、全員参加型で大きなダメージを生む降雨等のピークカットをしようとしています。豪雨時におけるピークカットの手法としてレインガーデンという手法がありますが、これは例えば下水管のみで全てを処理しようとする膨大な費用がかかるため、三分の一の雨水は地下浸透させることで凌ごうという発想です。インフラは公共のみに任せず、我々が参加して見守る必要があります。地方地域においては先ほど申し上げた地域循環共生、そして都市部あるいは中心市街地についてはグリーンインフラという考え方で、なんとか当面は凌げないかなと取り組みを進めているところです。

名古屋では久屋大通という幅員 50m道路の、片側3車線であったものを原則1方向1車線にするという日本で初めての取り組みを行いつつあります。そしてその真ん中の公園を PFI による民間活力で活性化させ、テレビ塔の北地区がすでに共用されています。今後は南地区において商業と空間をどう上手くコーディネートしていくか検討を進めているところです。

最近の仕事では渋谷の再開発や、20年間かかりましたがご好評いただいております二子玉川ライズ、また東急電鉄が商業と公園を一体化するという発想で南町田のグランベリーモールというものが現実化しています。

私は那須塩原をよく知っておりますが、リゾートからリトリートへという流れを受け止めていただきたいと考えています。日本は、IT 産業におけるイノベーションは得意ですがクリエイションが非常に苦手です。その最大の敵はストレスです。いかに自分が解放されて、サブカルチャーとの化学反応を起こしクリエイティブな発想を得られるかという点から、那須塩原の魅力を詰めて行きたいと思います。よろしくお願いいたします。

朝比奈氏:

涌井先生、非常に含蓄に富んだ話をどうもありがとうございました。今回も前回同様の形式で、1社あたり 30 分でヒアリングを行ってまいりたいと思います。ヒアリング

に先立ちまして、まずはこれまでの有識者会議での議論の概要について簡単に説明したいと思います。

(配布資料に沿ってこれまでの議論を説明)

まず初めにお話いただきますのは、内閣府クールジャパン地域プロデューサーの陳内様です。第一回目の議論の際に小場瀬先生から、地域資源の魅力をどう上手く発信するかという意見があり、民間の方々にお話を伺うということになっておりました。この点陳内様はデジタルで伝えることについては右に出る者はいないということで、お招きさせていただきました。それでよろしく願いいたします。

(ヒアリング1:内閣府クールジャパン地域プロデューサー)

陳内氏:

これからは、指標の変化に伴って無名な組織が勝てる時代がきております。まちの定義は、リアルなモノづくりにとどまらず、それにバーチャルファーストが伴わないとリアルなまちづくりが盛り上がらないというふうに考えています。そこで数点お伝えしたいがございます。

まず、結論の部分ですが、デジタルファースト宣言を那須塩原市、あるいはエリアでされるといいのではないかと思います。

次に、それをどうやりきるかという点ですが、組織、人材、予算が重要となります。市の広報予算や、市の「届け方改革」という観点で、世界の民間企業では50%以上の割合で、デジタルでの発信手法が使われていますが、日本では3%程度に留まっています。ウユニ塩湖などはそうした発信によって多くの乗り継ぎ便を使っても世界中から観光客が来ていますし、日本でも長野県の湯田中温泉がTwitterによる発信で多くの集客に成功しています。また、インターネットという技術を地域の政策に活かすという意味では、別府市はデジタルファースト宣言を行い、総合計画を大きく塗り変えようとしています。浜松市や島田市もデジタル変革宣言をし、加えて組織づくり、人材登用、予算編成を行なっている最中です。愛媛県では県政全体としてデジタルマーケティング室を設置して大改革に成功しています。例えばお遍路、サイクリングの聖地といった魅力を伝達する空中戦に勝利した形です。

それから、サーロインの法則(3:6:1の法則)というお話をしたいのですが、3の予算でモノづくり、6の予算で人々に情報を届ける(魅力の届いてない部分に情報を届けきる)、残りの1の予算で効果を計測し機能させるという法則です。民間企業は効果計測をしなければやっていけないのですが、行政分野ではなかなかできなかった事柄です。これまで愛媛県などの文書の中に「サーロインの法則」を明記していただいているのですが、今回全分野×デジタルファーストという枠組みで整理し直すのはい

かがでしょうか。

先ほど「那須塩原」という単語が Google 上でどのように検索されているのかというデータを拝見しました。すると04年以降検索数はウナギ上りで、いま鬼怒川と同じくらいです(04年時点では鬼怒川の1/4程度)。ところが那須塩原で買う商品がないとか、検索した時のHPがあまりワクワクしなくて移住につながらない、子育ての部分で補助金の制度がよくわからないという可能性もあると思いますので、デジタル予算を用いてこういった部分を改善するチャンスがあると思いました。

最後になりますが、Grow with Google というグローバルなプログラムをついに日本でも発動しました。これは日本の地域1000万人に無償でデジタルトレーニングを提供するというもので、すでに広島県や東北全体とパートナー関係を結んでおります。もしデジタル行政の際に地元の方々の理解が得にくいということがあれば、日本の皆様のデジタル知見の向上にご協力できると考えております。

FAXが主要な国、そしてデジタル決済がレジでできない国は日本だけです。部分部分ではあっても、全体を俯瞰した骨太の方針における総合戦略に沿って、那須塩原で実証実験をされるのがいいのではないかとのご提言をさせていただきたいと思います。そのやり方については、私どもだけでなく有識者の方々の意見を幅広く含んで考えることができるのではないかと思います。

朝比奈氏：

ありがとうございました。陳内さんは前職が JTB ということで、魅力の伝え方という点で非常に詳しいですので、ご質問いただければと思います。それでは小場瀬先生お願いいたします。

小場瀬氏：

データに関する大変魅力的なお話でした。多分それをどんどん突き詰めていくと、市役所という空間は要らなくなると思うのですが、そこまでかなり徹底している自治体というのは世界にあるのですか。

陳内氏：

エストニアはかなり有名ですが、それ以外ですと LINE さんのような企業と提携する形で、スペインのある自治体で「LINE 自治体」というのをやっています。税金を使わずに LINE 側のお金を使います。例えばどこかでマンホールが壊れていることがあれば、それを市民が LINE で自治体に送信し、すぐに直すという、中間コストをかなり省いたモデルが、グローバルカンパニーとの提携という文脈で挙げられます。浜松市ではビズリーチと提携し、週1でビデオ会議にて働いてください、という風に人材を日当の嘱託制度で協働して貰っています。経産省の週一官僚も好事例です。

テーマでいうとワーケーション(ワーク×バケーション)のように、いわばどこでも働いて良いという人々が増えています。インターネット回線だけ引いてあれば、デザイナーやクリエイターが新幹線で働けるようになっていきます。それを宣言とともに那須塩原で有名にしてしまうというのも方針としてあるかと思います。

山島氏:

旅行の話で、HP を見てもちゃんとしたマップがない、ダウンロードできないという問題がありますし、栃木県はインバウンドがものすごく少なく、その増加率は全国最下位です。その中で、例えばデジタルのユーザーが、那須塩原そのものではなく、東京の周辺で行ける場所という形から那須塩原に掘り下げて行けるようにすることが非常に重要だと思います。

陳内氏:

おっしゃる通りです。これはむしろデジタルの得意分野です。そのためには HP をちゃんと作ること、それから動画を作ることです。スマホ上のムービーでどこに行こうかなというのが非常に大きな割合を占めています。また、リンク付けについては、いま那須塩原市の HP があると思います。そこに Google analytics で分析を行うと、どういう言葉でその HP にたどり着いたのかというファクトを知ることができます。大事なことはファクトを整理すること、そこから実際に実験をする、例えば客寄せのある周辺の方々に実際に 100 万回アクセスしてもらってどんな効果があるのか、本当に検索数が増えるのか、ということを実験で行うと効果的です。

涌井氏:

デジタルを推進しておられる Google が意外とアナログにこだわっておられることを知りました。今現在は骨格と筋肉をつければ健康だという国づくりをしてきているのですが、神経節をどう機能させるかがおろそかになってしまっている。「いま健康的な人」というのは、骨格と筋肉だけでなく、データという神経節を徹底的にアナログに回していると思います。Google でも本社のオフィスデザインは徹底してアナログです。つまりアナログとデジタルは実は相性が良く、その両者の共存が大事だと思うのですが、間違いないですか。

陳内氏:

間違いないです。幸福とは何か、経済とは何かという点で右脳左脳のバランスが大事であるのと同様に、効率的なまちづくりにおいてもデジタルとアナログのバランスが重要です。

松岡氏：

デジタルファースト宣言をまず行うということでしたが、その次に何が必要ですか。

陳内氏：

宣言をするからには、組織、人材、予算が必要になり、そのためには議員の方や経済界との合意形成が必要です。デジタルが一番少ない金額で成功しやすいので合意は比較的容易ですが、宣言した事柄がどれだけ達成されたかについても、デジタルであれば分析しやすいです。まずやってみることが大切で、失敗してもなぜ失敗したのか、ダメところもわかるのがデジタルの良いところです。

渡辺市長：

貴重なお話ありがとうございます。地方自治体や政治の世界はデジタル化の点でかなり遅れていると思います。前回の参院比例選挙でのれいわ新選組などの成功は、SNS のインフルエンサーを活用した面もあります。栃木県全体もデジタル化に関しては遅れていると思ひ、所得は実は全国で3番目ですが、その分ものづくり県として成功しているということですので、このままで良いというマインドが働いてしまう面があります。色々な名所を SNS と結びつける必要があると感じました。民間のインフルエンサーを上手く活かすべく整理したいと思います。

そこで一つ質問ですが、私は那須塩原をサステナブルにしたいと思っております、一つは水のない地域に疏水を通した小水力発電や、あるいは牛乳生産を生かした牛糞によるバイオマス発電などが考えられます。いまは発電した電力を東京に売っている状態ですが、それを特定の地域に充当できるようにしたり、何が起きても生き延びられるエリアを作りたいと思っています。サステナブルなエリアを作る上でデータ面においては何をしたら良いでしょうか。

陳内氏：

まずどんなデータを見るかという指標の決定です。認知→来訪意向→実際に来る→他者への推奨の4段階です。人間の行動の段階が様々ある中で、今は実際に来た人の数しか見ていないと思います。まず(行きたいと思った人の数)／認知と言った割り算の値を毎週チェックするのがいいかと思ひます。行政の仕事というのはこの割り算ができないものがかかなり多いです。例えばポスターを貼っても何人見たのかわからないと言った具合です。割り算ができる事業を行うというのは事業の透明性を高めることにもなります。事業仕分けという意味でも、データの分析できるものは公共がやって、それ以外は民間がやる、というような合意形成をできるだけ早く作るということが大事です。

朝比奈氏：

ありがとうございました。続きまして長大の幸田さんからプレゼンいただければと思います。

(ヒアリング2:株式会社長大)

幸田氏：

よろしくお願いいたします。

長大というのは、もともと瀬戸大橋を国家プロジェクトで作る話の中で、色々な業界から集まり、解散する予定だった集団が解散されずにできた会社です。平成 11 年に議員立法で PFI 法ができて、そこを行政支援していくべきということで、我々の部署はコンサルティングをさせていただいております。今まで議論されてきたことを加味しつつ、駅前再開発の我々なりの考え方をまとめてきました。

まずきちんと那須塩原の歴史・文化を分かった上で、那須塩原市が総合計画の第二期に入ってどのような整理をされているのかという点についてです。行政文書は非常に分かりやすいものでした。

そこで駅前の再開発に焦点を絞って、まちづくりにおける賑わい獲得のための構図がどうあるべきなのか、ということを検討しました。その中では那須野が原へのエントランスゲートの必要性、那須塩原駅のセルケース(駅と一体となった公園的空間の整備)、駅・駅ナカ・駅近の効果的な機能集約を、人間の行動心理に基づいて配置する必要があると思います。

我々が考えるまちづくりでは、先ほどグリーンインフラの話もありましたが、やはり単なる駅前再開発だけでなく、総合計画と整合させる必要があると思います。文書上は整合しているようですから、さらに具体的な部分を先生方からの意見をもとに具現化していくのだと思います。加えて、前回のヒアリング結果を見ると、かなり観光的な部分が挙がっていました。市でも観光振興のマスタープランが始まったばかりということもあって、それとの整合性を図る必要があるのではないかと思います。気候変動対策局の設置の報道もありますし、グリーンインフラの重要性なども上位計画の中に入れていくべきだと思います。以上が駅前を見た場合の印象として感じる事柄です。

今後労働生産年齢人口が減少していく上で、これからのまちづくりの課題はサステナビリティにありますので、コンパクトシティという部分を那須塩原の街の核に位置づけながら考えていくべきだと思います。藤沢のサステナブルスマートタウンはパナソニックの工場の跡地として成功した事例です。ただ完成が 2014 年で、それ以前に計画は始まっていますから、少し前の考えが込められています。ですから今スーパーシティ等の構想を国も積極的に色々な制度で推進していますから、単に太陽光をするというのではなくて、このような新しいまちづくりをする方が、街の価値を上げる、あるいはテレワークなど新幹線の活用という意味でより良いのではないかと思います。

それからヨーロッパでかなり取り組まれている一つの事例にエコミュージアムがあります。この定義は、「ある一定の文化圏を構成する地域の人びとの生活と、その自然、文化および社会環境の発展過程を史的に研究し、それらの遺産を現地において保存、育成、展示することによって、当該地域社会の発展に寄与することを目的とする野外博物館」です。街全体を博物館として捉えて設備を配置するものでして、山形県朝日町や富浦といった地域で取り組まれようとしています。以上になります。

朝比奈氏：

駅前のゲートウェイというキーワードに始まり、ちょうど市長からお話が出たブリヂストンの跡地に関する言及までいただき、様々な可能性・概念を出していただきました。ありがとうございました。先生方からご質問お願いいたします。

山島氏：

跡地を活かした新しいまちづくりという打ち出し方は非常にいいなと感じました。それからエコミュージアムについてですが、アートを軸に地域を考えていくという話が最近ありまして、その点ではご指摘のようなことが有効だなというふうに感じるのですが、改めてコメントをお願いします。

幸田氏：

我々も色々なまちづくりを見ておりまして、なかなか藤沢ほどのまとまった成功というのはないのですが、奈良県の新井知事が県立病院跡地の再開発で、健康ビジネスを核にしたまちづくりやろうとしたことがありました。しかし医師会の大反対で実現しなかったというように、なかなかうまくいかないものです。これからは行政側がお金をつぎ込むのではなく、民間が投資したくなるような施策を打ち出して、投資とその回収という win-win の関係が大事になると思います。民間の活力でインフラを整備していくというような新しいまちづくりを明確に打ち出すことが今後の行政の在り方なのではないかと感じます。

松岡氏：

エコミュージアムにもスケール的な感覚があると思うのですが。要素は色々あるのでそれをどう繋げるのが課題だと考えています。

幸田氏：

スケール的には、県レベルだと大きすぎるのですが、那須塩原市くらいだといいいのではないかと思います。

小場瀬氏：

藤沢は非常にいい参考事例だと思います。働き方改革が叫ばれる中で、東京ー那須塩原という距離での通勤を本格的に改革の中で突き進めるのであればかなり大きな魅力になるのではないかと思います。テレワークやワーケーションに加えて、女性や次の世代への配慮まで含めた仕組みを作ることを本格的に考えると、跡地の 35ha という広さはちょうどいいですし、可能性はかなり大きいと思います。最初は藤沢プラスアルファでいいのですが、30-50 年経つとウェルネスがより際立つようなまちづくりになっていると良いと思います。奈良の例を鑑みますと、新しいまちづくりの中で医者の必要性ができるだけ少ないようにしたほうがいいと思いますが、その辺はどうお考えですか。

幸田氏：

奈良の失敗例というのは、県の主導型事業でして、結局これは医療と地域包括ケアをミックスしたもので本来は基礎自治体が主導すべきという意味で、流れの整合性が取れなくなってしまったというのがあります。ニュータウンで問題になるのは、30 年という時の経過で高齢化が進行し、家売りたくても売れないという状況があります。そこで例えば大手不動産会社のような大きなネットワークを持つ会社であれば、その家の価値と、その不動産会社が他所で保有する家の価値とを等価交換する、という譲渡特約付きの権利を購入時につけることができ、その結果人口が流動化するのではないかという話が出ていまして、そうした商品開発が進行していると思われま

涌井氏：

なるほど、と思いました。ただ幸田さんと意見を異にする部分ですが、ダボス会議では先端技術によってホワイトカラーの失業が増えると指摘されている通り、単に産業革命の延長で労働生産年齢人口の縮退が起こるとするのは古典的すぎると感じます。これからのものづくりは発展途上国に出て行くので、先進国の役割はクリエイションでありイノベーションだと思います。そしてそこにいかに環境負荷を軽減するかというのをセットとして考える必要があると思います。ですからあまり労働生産年齢人口の縮退が地方の過疎化を生み出すという考え方は好ましいように思いませんから、那須塩原がそうした考え方に埋もれないようにしないといけないと思います。

朝比奈氏：

幸田さんの話はクリエイティブクラスを呼び込む拠点づくりという話にもつながると思いますが、政府の旗振りの一つに MICE の推進があります。その辺りを含めてどのように感じますか。

幸田氏：

ここで MICE の発想はありませんでしたが、35ha の広さがありますので、例えば住宅だけでなく行政機能、そして災害が少ないということですから将来的には中央省庁の一部機能が移転してくる、というような大きな流れで考えるのも重要かもしれません。

渡辺市長：

お話ありがとうございます。2点質問があります。一つは総合計画と私の公約の整合性のことですが、私自身イレギュラーな時期に市長になりましたので、市の総合計画と公約が完全に一致していません。ですので、その整合性を優先すべきか、別立てでやるかという議論になり、今のところ、別立てでやろうという風になっているのが現状です。これはやはり整合性を優先すべきなのか、というのが一点です。

それから那須野が原は将来的にはサステナブルなゾーン、例えば実証的な地区にするといいのではないかと考えているところで、そのメインはエネルギーのサステナブルだろうと考えているのですが、具体的にこういうコンテンツがあるといい、というのがあれば教えてください。

幸田氏：

1点目についてですが、良いタイミングで総合計画の改訂版が出ている部分もありましたので、自分の公約を進めていくのであればそれを本編に何らかのタイミングで入れられるのが良いかと思います。2点目についてですが、スーパーハイウェイ構想と言って、筑波大学が大学病院の中に独立センターを入れて、様々な病院と連携する、というのがあります。大学などの学術機関との連携というのは一つスピード感を持たせる上で良いのかなと思います。

朝比奈氏：

貴重なお話ありがとうございました。それでは続きまして東急不動産様の方からヒアリングさせていただきたいと思います。磯目様よろしく願いいたします。

(ヒアリング3:東急不動産株式会社)

磯目氏：

よろしく願いいたします。私共は那須塩原市内でハンターマウンテンというスキー場を経営しておりますので、そこでの取組とリレーションについて、ということと、そしてまちづくりという観点で、弊社はリゾート地で別荘事業をしておりますので 30 年前の分譲の活性化に関する悩みを持っておりますのでそこでの取組をご紹介させていただきたいと思います。

弊社のハンターマウンテン塩原は、開業して 30 数年になりますが、去年のお客様

の入れ込みがスキーシーズンで27万人、夏はゆりパークをやっておりまして5万人お越しいただいており、合計で年間約33万人の方にお越しいただいております。やはり今スキー事業は国内市場が弱含みですので、国交省も取り組んでいただいているインバウンドについてはまだまだ可能性があると考えています。

今弊社でインバウンドの伸びが大きいのが北海道の倶知安、ニセコのスキー場です。そこでは半数以上が外国人という現状で、官民一体となって様々な取組をしております。

ハンターマウンテンは、外国人は年間1000人程度ということでもまだまだ伸び代があります。それまで勤と経験に頼ってきた部分を変え、陳内様がおっしゃっていたデジタルの部分強化し、中国人インフルエンサーと協力して中国・台湾・香港の方々への認知度を、SNSを通じて高めていこうというのを試している状態です。

旅前の検索にうまくハンターマウンテンを引っ掛けていただくという取組をしています。那須塩原は東京から一時間強という良好なアクセスですので、例えば東京中心に滞在する外国人が一泊二日で那須塩原にお越しいただいて、初日は温泉を楽しんで、翌日スキー場にきていただくというような上手い流れができないかなと考えております。アウトレットもあって、市もうまく周遊できるようなまちづくりを考えていらっしゃるので、そこを一緒にやることのできたらな、と考えます。インバウンドはこれからの成長のキーワードですので重点的に協力できたらなと思っております。

那須塩原駅利用者についてですが、弊社でシャトルバスを運行しております。昨年ですと6300人くらいが弊社のバスを使用いただいております。駅周辺がやはり少々寂しいですから、駅で時間潰しやお買い物というのができません。それができれば民間も目をつけて投資をしよう、という流れになるかと思っております。

それと別の事例として、弊社で長野県の蓼科高原で別荘事業をし、施設内もだいぶ老朽化しておりますので2年前にカラマツが魅力的な街ということから、「森暮らし」というキーワードで、フィールドアスレチックを拡充するなど再活性化を行っておりますので、参考までに資料を読んでもいただければと思っております。

先程来出ているワーケーションについては我々も注目している部分で、蓼科においても「森で働く」ということで何かできないか、というところで調査・研究し始めており、来年度からスタートさせて行くところです。那須塩原においても交通費往復1万円、宿泊費1万円の計2万円で、法人の合宿を行うといったニーズもあるかと思っておりますので、その意味で那須塩原は良いロケーションで可能性があると感じております。その点ブリヂストンの跡地をワーケーションの実験場として使えるのかなと思っておりました。

最後ですが、ニセコの地区において地域通貨を導入しまして、エリアマネジメントという団体を中心に海外のお客様のキャッシュレスに対応して、スマホにチャージしてもらって地元のお店で使ってもらおうという取組をしております。地域連携が希薄になった中で、70店舗くらいのお店がありますから、それに自治会機能もまとめて活性化して

いこうということをやっております。

朝比奈氏：

インバウンドの可能性からブリヂストンのアイデアまで幅広くご意見頂戴しました。ありがとうございました。電子マネーの活用も非常にいいアイデアだと感じました。先方からご意見・ご質問お願いいたします。

山島氏：

栃木県には中国人や東南アジアからの人はあまり来ていないようなのですが、インバウンドという意味でのターゲットはどういった地域になりますか。

磯目氏：

マーケットの大きさという意味では中国・台湾・香港あたりを視野に入れていました。

山島氏：

色々な楽しみ方の一つとしてスキーをするというのは、ウェアのレンタルなど準備が大変だと思いますので、そういう意味で日本人と外国人で一泊二日の意味合いは違うと思います。

磯目氏：

今年からは事前にウェブ予約できるサービスを開始しましたので、それによって手ぶらでお越しいただけるようなこともできます。

涌井氏：

ニセコは日本郵船から東急不動産が買ったリゾート地です。当時のニセコには潜在的スキー場としての高い優位性がありながら活気に欠けていて投資しにくかったので、別な魅力をと考え、オーストラリアからのワーキングホリデイを女性に限って受け入れるという取り組みを始めたところ、3年経過すると口コミでオーストラリアから多くの観光客が来るようになりました。そういう意味で注目すべきなのは、東京における外国人の就労者数だと思います。これを分析すると別の新しい呼び込みができると思うのですがこのマーケットはまだまだこれからです。つまり旅行者ではなく外国人就労者をいかに呼び込むかというのは戦略の穴場かと思います。

小場瀬氏：

インバウンドも外国からの観光客と先ほど話に出た外国人就労者の2種類あると思います。日本人のスキーヤーが車に来る中で、外国人の就労者も同じ状況でしょう

か。外国人観光客は駅を利用しているという理解でよろしいでしょうか。

磯目氏：

外国人観光客は、基本的には鉄道を利用していると思います。

渡辺市長：

お話ありがとうございます。例えば鎌倉や軽井沢は、駅前に一歩出ると、そこがどのような土地か想起させますが、那須塩原の場合はレンタカーを借りて奥地まで行かないとわからない状態です。ですから駅前に那須塩原を体験できるゾーンを設けないといけないと思います。塩原温泉にある足湯は現地にあるのでは効果は限定的です。

もう一つは、鎌倉や軽井沢に何度も足を運ぶ人には、その土地の「ライフ」を体験したいという思いがあるのだと思うのですが、那須塩原「ライフ」というのがイマイチないですから、工場跡地に那須ライフゾーンを作り、地域通貨などのテクノロジーとは別に、ソフト面での打ち出しをする必要があると思うのですが、そういう部分の実現可能性を伺いたいです。

インバウンドという点では、実はオーストリア・リンツ市と姉妹都市を結んでいまして、中学生を相互受け入れしています。ですから海外との繋がりは前からある上に、私もベトナムと縁があって首相にお会いできたりするなど、これを個々でやるのではなく大使館経由でちゃんとした取り組みを増やしたいと考えています。

最後に、スーパーシティに関して東急不動産では関心はありますでしょうか。

磯目氏：

スーパーシティ構想に関しては大変興味深い取り組みだと思います。

朝比奈氏：

磯目様どうもありがとうございました。それでは次に、北山先生よろしくお願いたします。

(ヒアリング4：株式会社北山創造研究所)

北山氏：

よろしくお願いたします。

那須塩原駅は何もなくてかなり絶望的ですが、世界の飛行場から学ぶ点があります。日本の飛行場は全部同じなのですが、ニューヨークやパリの飛行場はその街の表現をしっかりとっていて、あっと驚く印象を受けます。羽田も機能は素晴らしいですが、オリジナリティには欠けます。それと那須塩原駅が似ているのです。

とりあえず早く作れ、というのがあったと思うのですが、駅は街の玄関口ですし思い

出が募る場所ですから、そういう方向性にしないといけないと思うのですが、日本全国津々浦々そうはなっていないですね。

あらゆるものが分断された結果、スピーディになっていますけれど、逆に言えば人生がどんどん短くなるようなものです。駅はどんどん重要になっていますが、駅を出ると色々な地権者が所有するエリアや公共のエリアなどがバラバラにあって、一つの構想を考えてもそれ通りに開発できないのではないかと思います。

朝比奈氏：

私も8つの都市でアドバイザーをやって新幹線を結構調べたことがあるのですが、先生のおっしゃる通り駅はどれも似ていて、同じ設計会社が作っていたりします。そこそこ人が来る駅というのは4パターンあって、学校を呼ぶ本庄早稲田駅のパターンか、ショッピングモールがあるか、病院があるか、安中榛名駅のような住宅地が広がるパターンというふうに、まさにパターン化している部分もあります。

北山氏：

草津は12年くらい前から携わって、最初の頃は湯畑の周りが車やオートバイばかりで、街の情緒がないというのは住民も共有していましたから、まずそこを変えるのが大事でした。あとは草津には街としての才能があると思いましたが、それも変化の上で大切な要素です。

小場瀬氏：

自分は那須塩原の駅はヨーロッパの駅と比べると団地みたいだという北山さんのご指摘はもっともですが、那須連山が良く見えるという点が可能性があると思います。駅自体は淡白ですけど、連山を見て、あの奥に温泉があるのだなというビジョンを描けるというのが良いと思います。

北山氏：

一時間前にでも早く着きたい、という駅にして欲しいです。500坪くらいの大デッキを作れば可能性があるかなと思います。これならJRも協力してくれるかもしれません。

今も世の中のニーズとしてもっと緑が欲しいんだなというのを感じますね。芝公園付近というのは分散的な公園が沢山あるのですが、25-30年前に実は行政に指示されてエメラルドグリーン構想を考えたことがありました。最近この辺りを散歩したときに大変多くの人で賑わっていましたから、あのときの構想を実現しておけばよかったなと思うところです。手遅れになることがかなり多いです。

涌井氏：

30 年前に北山さんに東急プラザの改装をしていただいたことがあります。花をシンボルとして駅前に置いたのですが、最近再開発したビルの中に、重要なシンボルとして今も飾られています。本質というのは長く生きるものです。

それから本当なら那須塩原のターミナルを降りると巨大な足湯があって、そこを靴を脱いで歩く、それくらいの大きなスケールがないと人はわかりませんね。あとは那須塩原は通過駅ですから、通過している最中に一度ここで降りて見たいと思わせるような仕掛けづくりが大事です。

北山氏：

駅を降りたときに五感で感じるのは大事ですね。那須塩原を降りるとそこにずっと街路樹が続いています。駅そのものは JR さんがやるだろうからあまり手はつけられないでしょうけど、あの山々に続く緑という意味で、駅を出たあとを考えるのも大事でしょう。

涌井氏：

ロイヤルやヘリテージというのは那須塩原の特徴だと思うのですが、それをいまいち感じ切れません。あとは何か表現をするときに、モザイク状にする手もありますが1人のテイストで組み立てるのがいいでしょう。

朝比奈氏：

お話ありがとうございました。それでは休憩に入ります。

(休憩)

(意見交換)

朝比奈氏：

残り 30 分になりますがご議論いただければと思います。工場跡地について、視察の際に少し見た程度でしたが、前回からの動きとして、市民や商工会から要望書の提出があった中で、そういうところも含めて意見を伺いたいと思います。

涌井氏：

これまで先生方が色々地に足の着いたご議論をされて参った中で恐縮ですが、これだけ若い市長さんが出てきたことは那須塩原にとっては幸いではないかと思えます。若いということはその分未来を見ることが出来るわけです。私は国家政策総合動員型の戦略を立てるのが一番いいと思うのですが、独特の理念を打ち出せば、今度の国会で通ったような、区画整理その他の土地を扱う構造改革特区といった設定が

できる方向になっています。

そこで今日本が置かれている状況は、成功事例を如何に顕在化できるかにかかっていると思います。これまで都市政策に関しては、かなりの政策動員型が具体化し、民間も事業的に見合うので、スーパーな規模の再開発が数多く着手されました。渋谷や虎ノ門地区が大きく変わって、今や東京駅周辺より渋谷の方が家賃が高いという状況です。今の低金利政策の影響でもあります。しかし那須塩原では、そういう目先の不動産に目を埋もらせるのではなく、中長期でものを見ないといけません。政府としても地方で成功事例を多く作ることで、尻込みしている地方自治体を前進させたいというのが本音でしょう。

そういう中で、那須塩原が持っているのは、ソサエティ 5.0 のようなデジタル武装を横目に那須塩原しかできないスーパーリアリティ、すなわち自然の濃密な存在、それと共存してきた歴史をプロモーションすることです。土地の個性を知り、自然に逆らわない、そして地理的特性に起因する災害を凌げるといった営みが、今の畜産業という形になっています。

まさにスーパーデジタルな世界はスーパーリアリズムを求めます。それはアメリカの GAF A の本社の設計を見ればわかります。まるで温室のようなところ・緑の多いところで仕事をしています。これをおしひろげていけば那須塩原に勝機があるのではないかと思います。我々は贅沢なので両義性が欠かせません。デジタルならば、スーパーアナログというように、その両方がないと振り子が振れません。そういう意味で政策動員型であってほしく、スーパーリアリズムに関してはきちっと評価をしてその上で時代の先端を担うのです。

CO₂ ゼロ宣言なんていうのは、よほど覚悟がないと出せませんよね。掲げた以上は実現しないといけません。そのためにあの 35ha を起爆剤にしたスーパーデジタルな空間を作る。そして政府としても今スーパー・メガリージョン構想に対する反発が大きいので、慌てて地方創生と言い出した状況ですが、未だに有効策が見出せていないです。なぜなら先ほどの議論にもありましたが、労働生産年齢人口が縮小しているから日本の GDP が下がるというのが経団連未来研究所の報告書で打ち出されたためです。日本はいずれ韓国より GDP で下回るという内容でして、現実に平成元年の時価総額で世界のトップ100社の中に日本企業が32社入っていたものが、今はトヨタ自動車のみです。この間の経済の後退は著しく、これは我々日本人が創造的な民族でありながら創造性にあまり関心が行かなくて、安全で条件が満たされるところにのみ舵をきってきたためでしょう。

ゆえにイノベーションに一定の成果はあってもクリエイションはとうとう現れなかった。クリエイションというのは、これがあつたらいいねというところに既往の技術のイノベーションを総力で引き上げることでして、日本は江戸時代に得意だったことでした。それが蔑ろにされて、現代に明るみに出てきたのが家電でした。日本の家電は米軍

の技術を汎用化させてコストダウンさせたものでしたが、そのコストダウンに引きずられて、使わない機能をやたら増やした。オーバースペックの状態でも価格を維持しようとしたのが最大の問題で、白物家電はみんなダメになってしまいました。

その辺のことを考えると陳内さんの言っていることは間違いないし、それを中心にまちづくりをするべきですが、那須塩原の場合は自身が持っているスーパーリアリズムをどう大事にするか、それが市民への一番の説得力になるのではないかと、いう気がしています。私の言葉でいえばリトリート、みなさんの言葉でいうワーケーションというようなことに流れていこう、そういう意味での特区ということで名乗りをあげて、その中でありとあらゆる政府の支援をとる、というのが一番やれそうなやり方だなという気がしています。

朝比奈氏：

ありがとうございます。今の意見に加えてもいいですし、ほかにご意見ありますでしょうか。

小場瀬氏：

まちづくりの観点から言うと、35ha をまとめて何かできると言うのは滅多にない話です。これをうまく使えば、世の中の的にも最先端、あるいはまだ誰も気がついていないことができるかなと思います。結局芸術家というのはほとんどが失敗してしまいますが、唯一残った人たちがほかにもできないことをやっているわけです。しかし例えば芸大が、その後成功するのが一握りだとしても、それ以外を含む多くの学生を教育する意味というものはあるのです。つまり、誰も考えたことのないことを考えつく人間を発掘するには、それなりの規模で教育する必要があるのです。そういうようなトライアルを今回もしないと、画期的なものは難しいかなと思います。35ha というのは信じられないくらい良い条件ですね。

朝比奈氏：

ありがとうございます。松岡先生はいかがでしょう。

松岡氏：

話をお聞きして、駅前のお話と 35ha の話が中心でしたが、やはりこれらがつながることが重要で、東急さんのリゾートの話にもありましたが、駅がまず一つのアンテナとしてそこから全部がつながるのです。駅がどのようにデザインされて、駅に来た人がそこにとどまって、出たときにも楽しめる。総合的になんでも入れるとぼやけてしまうので、とんがったものをいくつか入れる。そこで北山さんのお話にもありましたけども、デッキの話はよかったなと思いました。天皇陛下がきた際に使えるし、緑を生かした道

路整備、今度できる市役所をうまく絡めた都市整備はできそうだと予測しています。

涌井先生もおっしゃいましたが、必要なものを最初にイメージしてやり遂げないといけない中で、色んな制度に縛られるけれども、国に対して、そして市民に対してのコンセンサスと幅広く行う中で、言葉だけだと伝わらないですからモノが必要な時が来るのだらうと思います。物事の関係性をカタチにする上で、ダメなものはすぐ消えるし、良いものは必然的に残るとというのがデザインの本質ですから、那須塩原のデザインは何かということには大変興味が湧きました。

朝比奈氏：

ありがとうございます。それでは山島先生お願いいたします。

山島氏：

35ha に住宅を作れば最低でも 4000 人入るわけですが、全部そうすることはなかなか難しいです。また、これくらいの規模は非常に長期的な話になりますので、涌井先生がおっしゃったようにコンセプトを色々作るのはいいいですが、それをどう実現して行くのかを考えていかないといけません。実際にデッキを作る上で、それができるのかできないのか、色々な可能性があります。最低限どこまで作るのか、今駅前に緑を守って駐車場を見せなくするというのがあって、それにさらにデッキができればいいですけど、どこまでできるのか、ダメなら全てが無駄になってしまう。それから駅から見た場合がどうなのかを考えるのかも重要じゃないかと思います。そこまでの段取りをしつかり考えないと実際が難しいなと感じます。

朝比奈氏：

ありがとうございます。時間も押してまいりましたので、最後市長からお願いいたします。

渡辺市長：

今日も素晴らしいお話ありがとうございました。

涌井先生には初めてお越しいただきましたが、私も前職が国会議員でしたので、国が変わっていくのにはものすごい時間と労力がかかるというのを見てきました。そして市長になった時に、当然議会の承認は要りますがものすごく権限が大きくて、自由に動けると印象を感じました。しかし一方で、他の県・市町村との横並び感が勿体無く感じてしまいました。地方じゃないとできないことがあるんじゃないかなというのをかなり感じます。

台風や地震、海外情勢など先行きの予測ができないことが多い中で、何が起きても生き延びられるゾーンをここに作れるのではないかと考えていまして、例えば幸田さ

んのお話のように省庁の移転などの議論が今後出てくると思っています。そういう時に、「いや那須塩原はもうやっていますよ」、「電力が仮に倒れても自前に作っていますよ」というように、先のリスクを見越した対処ができる、というようなことができると思っています。

軽井沢も住んでいる方々がみな軽井沢ライフをしているわけではないと思いますが、外から見るとなんとなくそう見える、そういうイメージを作る必要があるなど思っています。そういう意味で駅前に那須塩原らしさを創っていく必要があると、この会議を通じて思いました。こうお話しただいて、私としてもある程度考えが出てきたなという感じですか。

最初涌井先生はクリエイティブの話をされていて、私はもともと専門が美術史で同級生も学芸員が多いですし、芸術に携わる仕事が多かったですが、最近市長になってからクリエイティブを渴望することが多くなってきています。つまりそういうアーティストとしての視点で那須塩原を見ることに飢えてきていましたので、涌井先生のお話は本当にストンとききました。

また次回も会がございしますが、今までの議論は本当に素晴らしく、いただいたご恩、知識をしっかりと活かせるように頑張ります。本当にありがとうございました。

朝比奈氏：

今回は最終回ですが、今度は那須塩原市にてやるということです。今回はデッキ、街路樹、ゲートウェイという風の特徴を集約化していこう、そして 35ha の工場跡地についてなどを議論いたしました。次回は取りまとめということになりますので、また忌憚のない意見をいただいて、まとめの方に入りたいと思います。

(以上)